

フォーカス・ウィークについて

— 招かれた文学者群像

齊藤 末弘

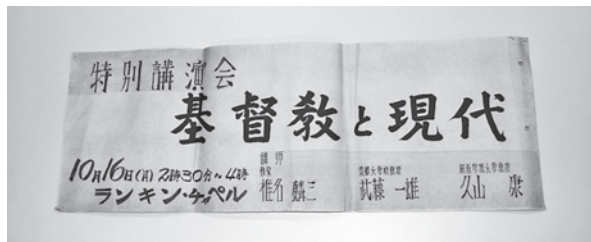
「枯れた骨よ、主の言葉を聞け。主なる神はこれらの骨にこう言われる、見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。」

(エゼキエル書37章4 - 5節 口語訳)

私は西南学院大学に29年間（1978年～2007年）勤続した。その歴史は少子化へ向かった困難な時代でもあった。従って大きな改革期でもあった。まず1991（平成3）年度から「キリスト教学」が4年で4単位から2年で4単位に変更された。次に1995（平成7）年の大学設置基準の大綱化によるカリキュラムの改正、それに伴うチャペル・アワーの変更（週4回が3回に）があった。クリスチャンの教員が少ない状況で大変苦労した。宗教部の委員会を何回開いたか、まとめるのに大変であった。まして部長会議では、朝拝、夕拝、昼休み等の意見が多数出て、回数を減らすことでようやく現在の時間帯を確保したのである。しかし、2001（平成13）年度から神学部が本学に移転し、大学チャペル運営がより活発化したことは幸いであった。私は、この改革の歴史のなかで特に「フォーカス・ウィーク」に来てくださった「文学者の群像」を中心に書いておきたい。

1. 椎名麟三、3度目の来学

プロテスタント芸術運動「たねの会」が、椎名氏を会長として活動を開始したのは、1960（昭和35）年3月であった。翌年10月の年譜を、私は次のように書いた。「13日から18日まで、キリスト教兄弟団15周年記念・第1回地方伝道講演旅行に参加」。そして梅光女学院、西南学院、活水女学院等を回ったのである。西南学院を訪問したのは、10月16日のことであった。宗教部の資料では、毛筆で『特別講演会 基督教と現代』講師 作家・椎名麟三、京都大学教授・武藤一雄、関西学院大学教授・久山康」と書かれ、11月1日付「西南新聞」には、次のように報じられている。「特伝²で椎名氏講演」という見出しで「クリスチャン作家、椎名麟三氏が本学恒例の秋期特伝



椎名麟三氏らの来学を伝えるポスター

週間の前奏として十月十六日午後二時半より、ランキンチャペル一杯の学生、教授、関係者を集めて『救いはキリストの手の中にある』と講演した。本学へ椎名氏が来校し講演したのはこれで三度目で、今回は『現代とキリスト教』と題する秋期特伝の最初に氏のキリスト者になるまでの過程を興味たつぷりに約三十分間講演し満場の拍手が送られた。」と…。

武藤、久山の両氏も講演し、椎名氏は、最後の講演であった。古賀学長の時代であった。この記事中「椎名氏が来校し講演したのは、これで三度目で」と書かれているのを、私は初めて見て、宗教部に調査を依頼したが、遂に不明であった。その記録が見当たらないのである。

私が1978（昭和53）年、西南学院大学に赴任するや否や、残っていた録音テープを聴く機会があった。「私はシイナ、バカゾウと申します。何故なら私宛の郵便物に『麟』の字を『馬』ヘんに『鹿』と書いてくる人がいるからであります。（笑い）。20年余の歳月を経た古いテープの奥底から、聴衆の「大笑い」の声と拍手が沸き起こってきたのである。

II. 宗教部への奉仕

私が西南学院大学に赴任したのは、1978（昭和53）年4月であった。その翌年6月、L. K. シイート宗教部長が「宗教主任」を依頼してきた。びっくりした。何故なら宗教主任は他のミッション・スクールでは、神学を専門に修めた人びとであったからである。「ここは、バプテスト派ですから」と、かなりの時間粘られて引き受けてし

-
- 1 学生の作った新聞。1934年3月の創刊号から1971年7月まで、241号を数えた。
 - 2 キリスト教特別伝道週間のこと。後にキリスト教強調週間、さらにキリスト教フォーカス・ウィークと名称が変わった。

まったのである。

以来、1979（昭和54）年7月、宗教主任（1981（昭和56）年6月まで）。2期2年。

1987（昭和62）年7月、宗教部長（1989（昭和64）年6月まで）。1期2年。

1990（平成2）年7月、宗教主任（1991（平成3）年6月まで）。1期1年。

1997（平成9）年7月、宗教部長（2001（平成13）年6月まで）。2期4年。

主任を3期3年、部長を6年務めたのであった。言うまでもなく、主任は、部長の推薦で、教授会承認であった。部長は院長（宗教局長兼務が多かった）の推薦で、教授会・連合教授会の承認であった。しかし、最後の部長任期、1999（平成11）年7月からは、現業部長³同様、連合教授会の選挙となったのである。これは歴史的に大きな変化であったことを特記しておきたい。

Ⅲ. 招いたキリスト教「共助会」の人たち

キリスト教「共助会」は、1919（大正8）年クリスマスに、牧師・森明（初代文部大臣・森有礼の子）氏によって、「学生伝道」を目的にして作られた組織であった。以来今日まで90年の歴史を歩んでいる。私も1959（昭和34）年、東京の中渋谷教会で受洗以来、同会の会員であった。従って「特伝」にそのメンバーを、招く機会が多かったのである。

1. 中央大学教授（独文）・小塩節氏

1978（昭和53）年春、1984（昭和59）年春、1997（平成9）年春と3回来校。彼は、後にフェリス女学院の院長をされた。

2. 二松学舎大学教授・文芸評論家・東京、中渋谷教会牧師、佐古純一郎氏

1978（昭和53）年秋。1959（昭和34）年秋にも来校されているので、このとき2回目。また1990（平成2）年秋にも3回来校され、「三浦綾子の世界」と題して話してくれた。日本基督教団の伝道誌「信徒の友」編集長。1957（昭和32）年8月「朝日新聞」に「文学はこれでいいのか」を発表以来、クリスチャンの文芸評論家として活躍。日本の津々浦々を伝道して歩いた。今、西東京市柳沢の老人ホームでひっそりと暮らしている。

3. 丸木美術館館長・関谷綾子氏（森有正の妹）

1979（昭和54）年春に来学。「原爆と平和」と題して訴えられた。

3 学生部長や教務部長などと同じく、全学的に選ばれる部長。

4. 東京女子大学教授・池明観氏
1980（昭和55）年秋。在日韓国人で鋭い文明批評眼の持ち主であった。特に、雑誌「世界」に1973年5月から'88年3月にかけて韓国軍政批判、「韓国からの通信」（T・K生）を書き続けた人として忘れ難い。
5. 弁護士・中平健吉氏
1983（昭和58）年秋。保守的法曹界に革新的な発言をした人であった。
6. 東京大学名誉教授・東京女子大学学長・隅谷三喜男氏
1988（昭和63）年秋。1957（昭和32）年秋にも来学されているから、2回目の講演である。労働法の権威で、特に五味川純平の「人間の条件」の主人公のモデルとしても有名であった。
7. 詩人・島崎光正氏
1987（平成元）年春。「わが旅の歌」と題して自らの半生を語った。私は「非常勤」時代。雑誌「共助」の編集を共にし、助け合い、励まされた。
8. 京都大学教授・飯沼二郎氏
1984（昭和59）年秋、農学の専門家でいつも鋭い「改革的」発言をされた。
9. 帝京大学教授・久米あつみ氏
1998（平成10）年秋。元東京女子大学教授。「場」の理論を使って優しく語ってくれた。小塩節氏の妹に当たる人。仏文学。
10. 成城大学教授・成瀬治氏
1991（平成3）年春。元東京大学教授で西洋史学の専門、特にマルチン・ルター研究の権威であった。「前向きに生きよう」と宗教改革の精神を説かれた。

以上10人の方々をお招きしたが、関谷綾子さんが、来学された時、講演後の座談会で、祖父の森有礼文部大臣が、刺殺された1889（明治22）年2月11日、犯人は「西野某」であったが、その犯人の血縁に当たる神学生が同席していて、お二人が固い握手を交わし、「歴史的和解」をされたのが、極めて印象的であった。

IV. 招かれた文学者群像

来学された文学者は、次のような人びとであった。

1. 高見澤潤子氏、1977（昭和52）年秋。劇作家。漫画「のらくろ」を描いた田河水泡夫人である。また文芸評論家・小林秀雄の妹に当たる。私は、「たねの会」で16年間、一緒に学んだ。田河水泡の弟子が長谷川町子であることは有名。彼女の

影響で高見澤氏は、キリスト教の洗礼を受けたのであった。

2. 佐藤泰正氏、1980（昭和55）年春。および1997（平成9）年秋。「近代日本文学とキリスト教」研究で有名。特に漱石、中也、賢治の分野での話は、学生に多大の感銘を与えた。
3. 曾野綾子氏、1980（昭和55）年春。作家。
4. 矢代静一氏、1981（昭和56）年春。劇作家。
5. 森禮子氏、1985（昭和60）年春。西南学院教会で受洗し、図書館に勤務した芥川賞作家。「たねの会」会員。
6. 田辺保氏、1986（昭和61）年秋。大阪大学教授。仏文学。
7. 田中澄江氏、1987（昭和62）年秋。作家。劇作家・田中千禾夫人。
8. 阿部光子氏、1988（昭和63）年春。作家。牧師。「たねの会」会員。
9. 小川国夫氏、1989（平成元）年春。作家。
10. 加賀乙彦氏、1998（平成10）年春。精神科医。作家。
11. 森内俊雄氏、1998（平成10）年春。編集者を経て作家。
12. 富岡幸一郎氏、1999（平成11）年春。都留文化大学助教授・文芸評論家。
13. 高堂要氏、2000（平成12）年秋。銀座教文館専務。劇団「同人会」所属の演出家・劇作家。「たねの会」会員。

これらの人々に既に触れた佐古純一郎、島崎光正、小塩節、久米あつみの各氏など数えると17名もの方々が奉仕してくださったことになる。そのなかで、特に印象的なことを記しておきたい。

◇曾野綾子氏

私は、1979（昭和54）年の秋、翌年の講師を予約しなければならなかった。まず作家の曾野綾子氏を候補に選んだ。当時『誰のために愛するか』が、ベスト・セラーになり、また同時に「朝日新聞」連載の「神の汚れた手」の作者として有名であったからである。若いころ訪問したことのある東京・田園調布の白い家をイメージしながら電話を入れた。すると本人が出られて「宗教部の依頼でしたら1日だけなら引き受けます。」と言ってくれた。更に、「謝礼は作家をお呼びする10分の1位しか払えないのですが…」と言ったら、「ミッション・スクールのことですから、いくらでも結構です」と言ってくれた。私は大変感動した。従って当時宗教部長であったL.K.シート教授が上京の時、「挨拶」に訪問してもらったのだった。1980（昭和55）年6月6日のキリスト教強調週間の様子について「西南学院広報」（第53号）は、次のように

報じている。「連日、多数の学生で埋まる」と…。

その日のことは、忘れられない。学生がチャペルに入りきれず、通路にも座ってもらった。玄関前の広場も学生で溢れた。ある先輩の教授は「かつてこんなに多くの学生が集まったことはありません」と言ったので、私は嬉しかった。人間の「マイナス」を「プラス」に変質させる秘儀にこそ、キリスト教の本質があることを、彼女はユーモラスに説いて、感動を与えたのである。

◇矢代静一氏

「最終日は、我が国の代表的な劇作家である矢代氏が『イエスとの出会い』と題して、氏が受洗するに至った精神的遍歴を次のように語った。『私は四十の坂を越して受洗した。それまでに様々な、キリスト教に関する文学や哲学に接して来たが、そんな中で、“自分が神を発見するのではなく神が自分を見つけてくれればいい”と思った。合理主義や立証主義のような知的理解だけでは信仰心は持てない。』（「西南学院大学広報」第57号）と…。講壇に上ると赤くなり、手をぶるぶる震わせていた。娘さんが「宝塚歌劇団」の女優であったので、大阪で会うのだと言って、急いで新幹線で帰られた。しかし、その数年後、彼は「書齋」で人知れず「亡くなって」いた。

◇田中澄江氏

「ひとはどう生きるか」と題して、日本の公教育に一番欠けているものは、「宗教」である。これを前提に、「3歳の時、父と祖父を亡くして、人間は死ぬものだと鮮やかに幼い胸に刻み付けられた。そして私は、絶対的に支配してくれるものを掴みたいと思った。」「洗礼を受ける直接のチャンスを与えてくれたのは、私の夫（田中千禾夫）の母である。」姑の「愛しさ」と恵みをとおして、30年経って受洗した話も忘れがたい。歓迎会の夕べ、彼女は、焼酎が好きで、お猪口で差し上げようとすると「斉藤さん、コップ、コップ!」とおっしゃったのには、驚いた。『日本の百名山』を出したばかりのころだった。

◇阿部光子氏

昭和10年代から小説を書き、戦前、山室軍平の長男・武甫と結婚した彼女は、貧乏生活を経験した。戦後53歳になってから神学校を卒業。小説『遅き目覚めながらも』を、久しぶりに書いて文壇に再登場。女流文学賞を受賞した。「真理の上に立つ自由」について、自己の半生・貧乏物語を中心にユーモラスに語ったのであった。

◇小川国夫氏

かつて私が東京で暮らしていたころ、YMCA 主催の講演会に招かれたことがあった。私は前座で、小川氏が主であった。終わってから二人で遅くまで語り合ったことがあった。1953（昭和28）年渡仏し、パリ大学や、グルノーブル大学で学んだ青春時代。ヨーロッパをオートバイで旅をし、雨の降る日ハンドルを取られて事故を起こしたこと、あるときはアルジェリア人と衝突し、一カ月の重傷を負った経験について「放蕩息子」の青春を語るのだった。

本学でも「放蕩息子と神の愛」がテーマであった。「私は、1927（昭和2）年藤枝に生まれたが虚弱な子で、休んでばかり。しかし作文と図工が得意だった。終戦前後、私は勤労働員や戦争を経験するうちに神経症になり、苦しみの果てに昭和二十二年十月、カトリックの洗礼を受けた。」⁴と、青春の苦悩を語った。そして「枯れた骨よ、主の言葉を聞け。主なる神はこれらの骨にこう言われる。見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。」（「エゼキエル書37」）を引用しながら彼はこう言ったのだった。「このような即物的聖句に、文学の原点があるのかもしれない。」⁵と。…彼が藤枝から博多へ来てくれたとき、私は迎えに行ったが、小さな布の袋に聖書とメモ帖を入れていた。微笑の穏やかな日常からこの間天に召されて逝った。

◇島崎光正氏

1919（大正8）年、福岡に生まれている。父は九州大学の医学部を出て将来を期待されたが、光正が生後一カ月目に結核で亡くなった。従って父方の里・塩尻へ引き取られ、祖父母に育てられたのである。母は、その後、精神病院で急死した。病弱な彼は、先天性脊椎破裂症で歩行が困難であった。チャペルの講壇に車椅子のまま話された。「たとえわたしは死の陰の谷を歩むとも、わがわいを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。」（「詩篇23：4口語訳」）

「わが旅の歌」というテーマでその波乱の人生を語ってくれた。いつもサキ夫人が付き添っていたが、「心の豊かさを求め、隣人愛に生きよ」と説いた彼の姿が今も甦る。

4 西南学院大学広報第89号（1989年7月3日付）。

5 同上

V. 元最高裁判所長官・藤林益三氏と作家・大江健三郎氏の来学

◇藤林益三氏

1987（昭和62）年11月24日、藤林益三氏が来学した。その動機は、当時法学部の高橋貞夫教授が、「是非、お招きして欲しい」と強く要望されたのだった。快く1日だけ引き受けてくださった。23日お見えになり、歓迎会をもったが、高橋教授も当然出席した。しかし、直立不動の姿勢でずっと通されたのに、すっかり恐縮した。藤林氏は、田中角栄を裁いた人である。当時80歳だった。「私は、山々が深い山村の一隅で生まれた。三歳の時に、父が死に、（中略）母の実家に戻った。やがて私と母は、町の醤油屋に住み込み、（中略）小学六年まで一生懸命に仕事をした。後に醤油屋は破産したが、担任と校長が、私をどうしても学校へ行かせたいと言って、大阪で成功していた郷里の樋口さんの援助で京都の中学へ行くことができたのである。」⁶とその貧しく苦しい少年時代を語った。1925（大正14）年、三高に進んだ時、映画「十戒」を見て感動し、「新約聖書と1611年のジェームスI世の欽定訳英語聖書とを毎日1章ずつ読み合わせ始めた。人生を導いてくださるのは神様で私は今日そう信じて疑わない。」と、日々感謝の日常を語った。そして約束どおり法学部の学術講演会も引き受けられたのであった。高橋教授もとても満足そうで感謝であった。

◇大江健三郎氏

1989（平成元）年は、学院の創立73周年、大学の開学40周年の年であった。開学40周年記念講演会に誰を招くか、と当時学術研究所長であった有田忠郎教授が私の研究室にやって来て相談した。私は真っ先に大江健三郎氏を推薦した。手紙を書いた。「あなたは、現代日本の文学者のなかで、最も誠実で、且つ正統的な方だと信じます。」という「正統性」をキーワードとして、私が手紙を書いたのである。有田教授も署名した。返事は「文学の研究者に評価されることは、私にとって喜びである。」という趣旨の快諾の返事が来たのである。二人は、手を取り合って喜んだ。

1989（平成元）年12月9日、演題「恢復することの意味」と題して講演が始まった。チャペルは超満員であった。主として彼は志賀直哉の「暗夜行路」を材料に、絶望的な、暗い状況下で我々は「恢復力」を発揮して現代を超克しなければならない、という趣旨の話をされたのである。終わってから大江氏は、障害者で、作曲家の子息・光君の「楽譜」をサイン入りで販売した。長蛇の列が続いた。本学の教職員のみならず、

6 西南学院大学広報第83号（1988年1月30日付）。

市民も多数聴講されたのである。1994（平成6）年の秋、一私はその時ロンドンにいた一大江氏はノーベル文学賞を受賞されたのである。



1989年12月9日 講演会の後、宗教部事務室で

〔下段左から有田忠郎学術研究所長、大江健三郎氏、田中輝雄学長、
上段左から高橋さやか元短期大学部教授、斉藤末弘文学部教授、
安徳典光宗教部長、原田三喜雄経済学部教授、日高利隆庶務課長〕